

## 政江さんの看病 ― 修学旅行 ―

昭和六十年 六年女児

「あたし、夜、ぜんそくがおごっがもしんねけど、うるせがったらごめんの。」それは、みんながふとんに入って楽しいおしゃべりをしていた時、政江さんが私たちに言った言葉でした。でも私たちは、今日は発作はないと思って別に気にも止めていませんでした。

部屋をまっ暗にして、私たちはかいだん話を始めました。でも、こわい話をするというのに、なんだかいつのまにかわらい話みたいになっ

「クス、クス、クス、クス。」とみんなわらいが止まらず困っていました。

と、その時

「ゴホン、ゴホン、ゴホン。ゼーゼー。」急に政江さんが苦しそうにせきを始めたのです。そのせきがとまって、こきゅう困なんになっているようで、

「ゼーゼー。」

と苦しそうにまたせきが続きます。

「大変だ。これだば。わたし、先生よんでくる。」と、私と友子さんは、ろう下へはだしで飛びだしました。やっとのことで先生を見付け、三人で急いで部屋へおかいまして。

ドアを開けると、みんな政江さんを心配そうに見ていました。武田さんと博美さんが

「冷やせばいなんねえ。」

「私たち、水くんできて。」といって水をくんできて、タオルを冷たくぬらして、政江さんのあせをふきました。

先生から、

「みんな、どうもありがとう。でも、もうおそいからねてなさいね。」といわれたけど、政江さんのことが心配で、ちっともねおれませぬ。

私たち六班の部屋のみんなは、ねないで看病してあげることになりました。部屋のみんなが交たいでねたり、おきたりして、かわりばんで政江さんの看病をすることにしたのです。でも、実際は交たいといっても、水をかえたり、

タオルをぬらしたりやっぱりみんな一緒にやっていたので、交たいという意味にはなりませんでした。しばらくすると、政江さんがやすやすやねむり始めました。

「もう、大じょうぶだと思うから、みんな先にねなさい。」と先生がおっしゃったので、みんなふとんに入りました。

先生方も帰っていき、聞こえるのは政江さんのこきゅうの音だけです。時々、「ウ、ウ、ウ、ウ。」と苦しそうになったりもします。

私は、政江さんのとなりのふとんに入りました。でも全然ねむれません。さっき、政江さんが言った言葉を思い出しました。

「私のぜんそくって、生まれつきだがらなおんねなんよ。」という言葉です。なんて気の毒なことでしょう。生まれつき元気で、病気といってもかぜや腹いたぐらいしか経験のない私には思いもよらないことです。どんなにか、つらいことでしょう。思い出して、また悲しくなりました。

「ゴホゴホゴホ。ウウーン。ゴホッ。」とつ然、またぜんそくが起こったようでした。私たちは飛び起きて、

政江さんのまくらもとにしゃがみました。

すごい汗です。私は政江さんのまっ赤な汗のでている顔をふいてあげました。それから、友子さんといっしょにまた先生を呼びに行きました。部屋へもどると、もうせきはおさまっていました。そして、いびきをかいてねていました。先生に何時か聞いたなら、

「一時だよ。」と教えてくれました。

先生がついていることにして、みんなふとんに入っすぐねむったようでしたが、私はいつまたぜんそくがおこるか心配でねむれませんでした。そして、空が明るくなってからみんなを起こしました。もうしばらくしてから、政江さんを起こしました。政江さんは、とっても元気がよかったです。私はとうとう全然ねむれませんでした。でも、政江さんの元気な姿を見て、ほっとしました。

修学旅行の夜は、政江さんのお母さんになったつもりで看病をしました。私は、生まれて初めての経験をして本当に政江さんがかわいそうだと思いました。私なんてぜ

んそくのこと、政江さんの苦しきなどこれっぽっちも知りませんでした。それに何より、私は、私達の組の人みんなやさしい心の持ち主だということも知りました。

こうして大変な夜は終わったのです。そして、みんなで「またみんなで行きましょうね。」と約束しました。